



福祉社会の開発・政策研究

福祉社会開発の実践モデルの構築：制度外コミュニティ福祉の生成と支援ワーク

コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト

- CRTP (Community work Reflection Training Project)、その始まりと可能性

朴 兪美

日本福祉大学福祉社会開発研究所

■今日的な地域福祉政策には、地域づくりとの接点が求められている。それを担う方法として、コミュニティワークへの期待が高くなっている。そのコミュニティワークの実践は、長年の間どのように蓄積され、今どのように継承されているのか。やや広範で難しい問いではあるが、さらなる展開が求められているコミュニティワークについて改めて考える必要があるのではないのか。その点で、平野・穂坂・朴編訳の『地域アクションのちから』(CLC, 2018)は意味ある示唆を与えることができる。

■本編訳書は、韓国住民運動教育院(CONET)というコミュニティ組織化をミッションとして進めてきた実践者集団が、3年余にわたって自分たちの活動をリフレクションしまとめたものである。その本は、コミュニティ組織化の基本方法として「アクション-リフレクション」の循環を提起しているが、彼らにとって、リフレクション(省察・振り返り)は実践者が身につける資質となっている。なお、彼らはコミュニティ組織化のトレーニング・プログラムを進めているが、そのトレーニングの重要な要素もリフレクションである。このリフレクションは、地域福祉の政策評価という点からも不可欠な作業といえるものである。

■実践現場でのコミュニティワークは、研修・事例研究等を通じて、その普及や深化が模索されているが、その多くの場は実践者の学習現場ともいえよう。そのような場の効果を高めるにしても、おそらく参加者個々人の中に起こるリフレクションは重要な要素になるだろう。そのとき、リフレクションというのは、実践現場と学習現場とが循環しつつ、それがアクションにつながるものと想定される(図)。まさにCONETが提起した「アクション-リフレ

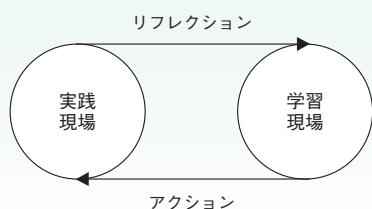
クション」の循環である。

■CONETのトレーニングプログラムでは、誰かの講義、誰かの実践というより、参加者個々人の現場が持ち込まれ(リフレクションを促す)、そこから得られた気づきを実践現場に持ち帰り(アクションに移す)、その結果を再びトレーニングの場に持ち込む(リフレクションする)ということが繰り返し展開される。トレーニングの場はリフレクションとアクションとを媒介する空間となり、参加者がその媒介を体験・体得するには一定の時間、すなわちトレーニングが求められる。こうしたリフレクションのトレーニングには他者との相互作用が重要な動力となり、そのような場の形成の中で、コミュニティ組織化の蓄積や継承が行われているのである。

■では、今のコミュニティワークの現場の中で、リフレクションを促すトレーニングの場はどのように形成されるのか。2018年9月、そのことを探るプロジェクト(CRTP)がスタートした。最初の呼びかけは、編訳書の活用方法を提案できるとの考えから、編訳者側・出版社側等の3名によって行われたが(当ニュースレターVol.9の7頁を参照)、回が重なるほど、寄せ集め方式で集まったメンバー(以下の目次を参照)の相互作用によって場が方向づけられ展開された。

■CRTPの場は、2019年3月現在まで5回実施されたが、その展開において大きな分岐点となったのは、「鳩のフンから女子大生」という事例の登場である(永坂氏の6頁参照)。その詳しい内容は控えるが、鳩のフンから展開される「地域づくり版わらしべ長者」のような事例をきっかけに、CRTPの場も次々と新たな展開を体験していくことになる。

■以下、CRTPメンバーそれぞれのストーリーを通じて、上記のような場の展開を確認していただきたい。本特集号はそのプロセスによる発信であり、ここまでワーミンアップしてきたCRTPの本番に向けての可能性を展望するものである。



図「リフレクション-アクション」の循環を促すトレーニング

Contents

2	コミュニティワーカーとは誰のこと?住民の私を紐解いてみた	▶明石雅世
3	活動の視覚化・意識化を可能にするプロジェクトの場	▶椿 佳代
4	CRTP から学ぶ!宝塚におけるコミュニティワーク実践	▶山本信也
5	CRTP から見えてきた土佐町社協におけるコミュニティワーク	▶山首尚子
6	「鳩のフンから女子大生」の事例が進化するリフレクション	▶永坂美晴
7	実践力を高めるためのリフレクション・プログラムの可能性	▶岡本晴子
8	『地域アクションのちから』から自身の実践を紐解く講座の企画と運営	▶荻田藍子
9	『地域アクションのちから』を活用した CRTP 研究会の可能性	▶池谷啓介
10	タウンスペース WAKWAK の活動と CRTP 研究会への参加	▶岡本工介
11	CRTP に学ぶ地域づくりの本質と振り返り	▶宇城絵美
12	CRTP のきっかけと期待	▶北川郁子

コミュニティワーカーとは誰のこと？住民の私を紐解いてみた

明石 雅世

名古屋市東区地域福祉活動計画住民ボランティア



C RTPで気づくワーカーとは誰のこと？

■2018年9月8日、C RTPの場が始まった。参加メンバーは、町・市の社協職員、県社協職員、NPO・一般社団法人職員、書籍編集者等。住民という立場で参加した私は、地域で様々な活動はしているが、第1回目の会合は、緊張感でいっぱいだった。

■韓国住民運動教育院著、平野・穂坂・朴編訳の『地域アクションのちから—コミュニティワークリフレクションブック』(CLC)を素材に、どのような活用ができるかを検討する場で、全5回を想定して進めていった。毎回終了後、宿題として、A4サイズ1枚以内に「気づきメモ」を提出し、次回にて報告・共有するという作業も行った。そして、2回目終了後、「私はワーカーである」という題で、気づきメモを作成した。

■私は、地域で、主任児童委員(民生委員・児童委員)、学区広報紙編集作成、区の地域福祉活動計画を進める住民ボランティア「みんなで創ろうわがまちひがし」、子育て応援♪ハーモニークなどのボランティア活動を行っているが、それは、一住民としての活動であって、住民リーダーの自覚もなかった。が、C RTPの場での私の発言などが、ワーカーとしての視点でとらえていることに私自身が気付いたからだ。そこで、自分のリフレクションをしてみることにする。



自分のリフレクションから見えてくるワーカーの素地

■私は、16年前に、区の社会福祉協議会地域福祉活動計画の策定委員の公募を知り、即応募をした。なぜ、応募したかと言えば、時を同じく、生涯学習センターで「女性セミナー」を受講しており、「女性学」について学んでいた。その合言葉は、「私の問題は社会の問題・政治の問題」と言われ、内なる視点を社会に向ける気づきと学びをしていた時だった。私の知らないところで制度や政策が決まり「知らなかった」では済まされない。チャンスがあればその場に居合わせることであり、その機会が地域福祉活動計画の策定委員の公募であり、応募となったのだ。そして、第1次、第2次、第3次と進み、2018年度は第3次計画の最終年度となり、この16年間で様々な力をつけたと感じている。

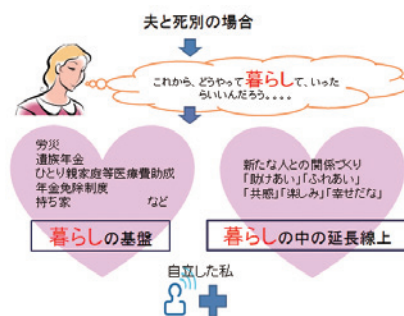
■特に、2015年から約1年半をかけて、朴氏とともに、ふりかえりの時間を重ね、『地域福祉実践研究』に「区社会福祉協議会地域福祉活動計画の住民参画組織『みんなで創ろうわがまちひがし』の振り返りから」を投稿できたことは、住民組織化の持続可能性についても考える機会となり、さらにワーカーとしての視点を俯瞰的に持つことができた。

■さらにさかのぼって、自分自身をふりかえってみる。1993年の出来事から始まる。結婚し家庭を持ち、2人目を妊娠中に夫と

死別。その後の家族の再生が、私のコミュニティワーカーとしての素地をつくったのかもしれないと思うに至った。

■夫の突然の死は、新たな家族づくりにストップをかけた。生活費は？住む家は？出産は？子どもの将来は？先行きがわからない不安が、突然襲い掛かり、その2年後に実の父も他界した。

■思いを巡らせ日常の暮らしが時間とともに過ぎていく中で、不安や迷いが少しずつ解決していく。実家に戻ることにになり、元気な母が私たちの食べることのサポートをしてくれた。労災があり、長女は幼稚園に入り、次女を無事に出産できた。そして、私と母は、「子ども2人に寂しい思いをさせない」を合言葉に、喧嘩しながらも笑いの絶えない家族をつくっていった。友人を多く持ち、友人たちは場面場面で私を助けてくれた。時には子どもの具合が悪くなれば病院まで車を出してくれた。時には家族同伴でキャンプに、ディズニーランドに、遊びに、と、連れて行ってくれた。そして私が友人たちにできること、たとえば、子どもの預かりや遊び相手など、暮らしの時間軸の中で行った。子どものために起こした行動が、人と人をつなぐワーカーとしてのふるまいだったので、はないかと、改めてふりかえる。



講座「地域福祉とは」pptの資料：明石作成

暮らしを生きる活動のワーカー

■その後も、PTA活動、子ども会活動で地域デビューも果たした。同時に、「女性セミナー」の受講をきっかけに、子育て、学校教育、環境問題、地域福祉など、暮らしを前提とする学びとの出会い、その暮らしの中で様々な事情を抱え生きている人(女性)との出会いが、私の生き方に大きな影響を与えた。

■また、夫の死別で、私が一番知りたかった「人は死んだらどこに行くのか？彼は幸せだったのか？」の答えを求めてお寺に足を運んだ。「人は生まれて死んでいく」という、それこそが原理原則であり、抗えないことを自覚して、今一度、「大切に暮らしを生きる」ということにつながった。

■そして、今、こういった体験、体現を繰り返し、「暮らしを生きる」ことを真ん中において活動をしている。しかし、暮らしは政治と密着しているし、様々な出来事は、他人事ではなく紙一重だと肝に銘じてもいる。

■自転車地域を走る。子どもが小学生の時、私に言った。「お母さんの自転車出沒率すごく高いね。」と。…やっぱり、私はワーカーなのかも？

活動の視覚化・意識化を可能にするプロジェクトの場



榑 佳代

災害ボランティアコーディネーター、防災士、民生委員

C RTP研究会からの気づき

■コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト(以下、C RTP)では、学び多い時間を過ごすことができ、参加することに喜びを感じている。参加の皆さんと一緒に話し合い、ワークショップをする中で、皆さんの「経験値」や高い「気づき力」が導いてくれたのか、私にも気づき力がついてきたように思う。また、自分の活動とここでの学びを照らし合わせることで、地域福祉の大切さに気づくことができた。

■2005年から防災・減災の活動を始めた。翌年には、集中豪雨や台風が被災地を多く作り、10月には中越地震が起こった。夏から秋にかけて、短期間ではあったが、水害と地震の被災地へ出向いた。その年以降も、たび重なる水害などで毎年どこかへ支援に入った。つながりができた被災地へは、直後の支援だけでなく、その後も、復興祭や周年事業にも足を運んでいる。普段は、防災イベントの企画や運営、減災を考える講座などを行うとともに地域に出かけて、防災についてのワークショップを行っている。私のようなイベント系のボランティアは、地縁組織と一緒に活動することが難しい。現に、私も自分が住む地域で活動ができるようになるまでに10年ほどの時を要している。地域で防災をテーマに活動している人を探しているということがきっかけで地域活動を始めた。このようなことがなければ、自分の住んでいる地域のことを知らずにいたと思う。そして、地域の人に受け入れられて民生委員となり、本格的な地域活動が始まった。



避難所運営訓練でのワークショップ風景

被災地支援は、地域福祉から

■被災地に出かけるたびに地域力について考えさせられる。もともと地域活動が行われているところでは、地震時は早めに救出できた、水害時に避難が早かった、炊き出し支援が地域でできたなど好事例を聞くことができる。できていないところでは、「長」の一言で「支援はいらない」と突き放される。そのようなところに限って、女性たちにヒアリングすると「支援してほしい」という言葉が返ってくる。また、障害者が避難所に行けない、外国籍の人は難しい日本語が分からずに、行政支援を受けそびれるなど多くの課題を残して復興が進むことがある。普段から地域福祉が地



兵庫県豊岡市水害ボランティアセンター支援(2014年10月)

域で考えられ実践されていれば、災害時にこのような困難事例が置き去りになることはないと思う。この考えに至ったのは、実践と学習の中から、被災者の声を聞く機会があったこと、地域活動の中から地域のことを理解できたこと、活動の中からいろいろな地域を見られたこと、なによりC RTPでの学びと気づきのおかげである。このようなことから「被災地支援は人道支援であり、地域福祉から」と言えるようになった。

『地域アクションのちから』の活用

■私は、『地域アクションのちから』(以下、本書)に出てくるコミュニティワーカーの「対象」となる住民である。地域活動をしていると住民自治を理解して地域活動をしている人たちばかりではないことに気づいた。多くの住民には、地域活動はわずらわしい、大変であるなど敬遠されがちである。今後は、住民主体で自分たちのための組織について学び直すために本書を使いたい。一般的なワークショップは、話し合いを空中戦にしないために付箋紙に記入して視覚化する。このようなワークショップに慣れている人はいいが、地域活動をしている人たちは書くことを嫌う人もおり、ワークショップが成り立たないことが多々ある。地域で本書のカードワークを行うとすると少し難しいと思うが、カードを使っただけのワークなので枚数を減らす、文言を簡素化するなど工夫すれば面白いと思う。

■本書は、コミュニティワークのリフレクションブックであるが、住民側のリフレクションとして、第1章「住民による組織化」、第8章「コミュニティ組織化のプログラム」、第9章「住民の学習・トレーニング」の3つの章をじっくり取り組みたい。特に、第11章「コミュニティ組織による会合の運営」では、V「司会者の役割と姿勢」、VI「ファシリテーターの役割と姿勢」、VII「コミュニティ組織の会合を運営する過程」など組織運営についてわかりやすく書かれている。日常的に行っている活動で「振り返りが大切」と言われているので、何かイベントを行うと、次回に向けての反省や準備することの整理、今回良かったことなど意見交換をするのが、それだけで終わっている。この時に本書を使って会の運営後にカード1枚、1枚を確認することで自分に「できていることとできていないこと」に気づける。この会を引っ張ってくださる朴氏がよく「疲れた時に読むといい」と言う。多くの人とワークショップをするのもいいが、一人でパラパラ見るものまた違った気づきが得られるかもしれない。

■気づきを視覚化と意識化してくれる本書を書いた韓国住民運動教育院と、それを翻訳して下さった翻訳者に深く感謝する。また、本の小見出しを用いたカードワークショップでは、カードの組み合わせで、初心者から経験のある人までワークを行うことで、自分の仕事や活動を見直すこと、気づき力を増やすことにつながり、知識の幅を増やすことができる。今後も、活動が続ける中で困った時、迷った時には『地域アクションのちから』が、より良い着地点に導いてくれる。他の人と同じことをしていても「気づき度」が違うことを思うと独り占めしたい素材である。

CRTP から学ぶ!宝塚におけるコミュニティワーク実践

山本 信也

宝塚市社会福祉協議会 地区担当支援課



宝塚市の概要

■本市は、大阪、神戸のベッドタウンとして、1970年代に住宅開発がすすめられた。北は田畑が残る農村部と南は人口の9割以上が集中して居住する都市部という面を合わせもち、歌劇のまちとしても有名である。

人口:234,349人、世帯数96,374世帯、高齢者数63,557人
(高齢化率:27.1%)、面積101.89km² (平成30年4月1日現在)

■宝塚市の福祉行政の特徴として、7つのブロックがあり、それらのブロック域に地域団体や地域包括支援センター、児童館、社協地区センターが整備されている。また、コミュニティ組織としておおむね小学校区域に20のまちづくり協議会が、自治会組織などをベースに組織化されている。

宝塚におけるコミュニティワークの展開

■宝塚市社会福祉協議会(以下、宝塚市社協)は、おおむね小学校区にある20のまちづくり協議会をはじめとした小地域福祉活動の推進を目的に、7つのブロックに地区担当ワーカー(以下、コミュニティワーカー)を配置している。コミュニティワーカーは、7ブロックに設置している地区センターを支援拠点とし、小学校区や、より小さな範囲へアプローチし、地域アセスメント、地域福祉活動の組織化、協議の場づくり等の支援を行っている。

■生活支援体制整備事業¹⁾がはじまり、当会では、コミュニティワーカーと生活支援コーディネーターの2職種で地域支援を行うこととした。コミュニティワーカーは、ブロック領域における地域支援を、生活支援コーディネーターは市内全域における地域支援を行っている。さらに、社協組織を機能的な編成からエリアごとの多職種連携チームとしてエリアチーム制をひいた。

■エリアチーム制は、地域を基盤とした多職種連携を進めるために小学校区ごとに個別支援ワーカーを配置し、ブロックを一つの担当課として組織している。エリアチーム制では、担当する地域をコミュニティワーカーと個別支援ワーカーが連携し、地域支援を推進している。

プロジェクトチームを通じたリフレクション

■コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクトチーム(以下、プロジェクトチーム)は、地域活動を様々な立場で実践する方々で構成されており、多角的な地域アセスメントと地域活動のプロセスについて議論することができた。

■本プロジェクトチームで議論を進める中、学んだことは2つある。

■一つ目の学びとして、宝塚市社協は住民主体を基本とした協議体、運動体、事業体という性格を統合して、地域福祉を実践している点から、住民主体こそが社協の哲学である。また、住民主体は、住民が主体的に物事を実行することと思われがちだが、住民による自己決定こそが住民の主体形成である。

■二つ目は、宝塚市社協が地域福祉を推進する過程で、制度狭間の対応について、様々な地域住民や地域団体、専門職と協働し、事業を立ち上げ、実践(開発)している点から、地域住

民と共に潜在化した生活課題を発見し、解決に向けて、啓発活動や地域活動、事業を展開しているプロセスが社会運動の一つであると気づいた。

■本プロジェクトチームメンバーからの意見で共通している点は、コミュニティワークには創造力が必要で、ルーティンワークだけでは、地域支援はなし得ない。また、様々な主体間の話し合いからの気づきこそが地域の大きな原動力となる。

社協の地区担当ワーカーのリフレクション

■『地域アクションのちからーコミュニティワークリフレクション』を読んだコミュニティワーカーの感想として、リフレクションのための章立てや小見出しが、地域支援の際に、感覚的にとらえていたキーワードよりも整理されており、理解しやすかった。

■兵庫県社協の研修では、実践事例を用い、各場面におけるコミュニティワーカーの課題意識や意図した関与についての解説があり、実際に自身が事例に関わる感覚で受講できた。

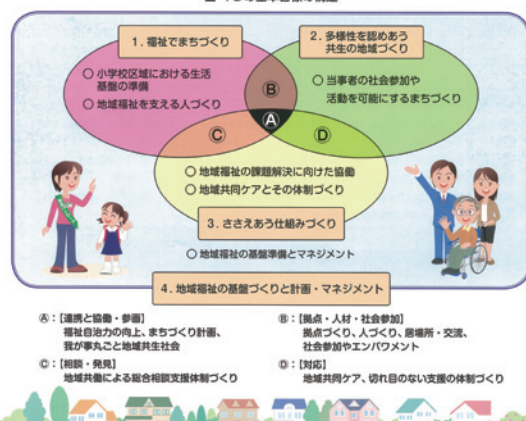
■研修の講師から「コミュニティワーカーが地域支援を行う上で、大事にしていることは何か?」、「コミュニティワーク視点の中に社会を変えるという視点があるか?」と問われた。その問いに即答することはできなかったが、コミュニティワーカーとして「生活課題の解決に向け、課題を抱える地域や個人をエンパワメントすることが大事であること」と「コミュニティワーカーとして社会を変えるという視点がなかった」という反省点を含めて、改めて気づくことができた。

リフレクションを通じた今後の展開として

■いつの時代も生活課題は山積しており、それらの課題に常に向きあっているのは、地域であり、住民であることは確かである。地域や住民と協働しやすい組織として、社協は存在している。今一度、住民主体の哲学に基づき、様々な社会問題に立ち向かっていく必要がある。

■これから宝塚市社協は第6次地域福祉推進計画を羅針盤とし、「福祉でまちづくり」、「多様性を認め合う共生の地域づくり」、「ささえあう仕組みづくり」、「地域福祉の基盤づくり」と計画・マネジメントという目標を掲げて(図を参照)、地域に潜在している主体やニーズをさらに掘り起こし、多様な主体による協働力を生み出し、振り返りながら(リフレクション)、大きな一歩ではなく、小さな一歩から進めていきたい。

■ 4つの基本目標の構造



1) 生活支援体制整備事業は、日常生活圏域に生活支援コーディネーターや協議体を設置し、生活課題を把握しながら、助け合いや支えあい活動が広がるように地域づくりをすすめる。

CRTP から見えてきた土佐町社協におけるコミュニティワーク

山首 尚子

社会福祉法人土佐町社会福祉協議会 事務局長



山間地におけるコミュニティ再生

■2009年に土佐町社会福祉協議会（以下、土佐町社協）が策定した第4次地域福祉活動計画は、地域力低下が顕著にみえはじめた中、視点と力点を旧小学校区単位に置き、コミュニティ再生へのスタートを切った。

■この10年を経て振り返れば、地域の方々の苦悩に寄り添いつつ、旧小学校区単位で話し合いの場をつくり、「場」が持つ力を信じて、手を取り合いながら様々な活動を展開してきた。今回、CRTPでの学びの機会を得て、模索しながら歩んできた道のりが『地域アクションのちから』（韓国住民運動教育院著）に理路整然と記されていることに驚きと感動を覚えた。

社協ワークのみえる化

■社協は地域共生社会の実現に向け、「具体的に何をどのように進めるか」その力量を問われている時にあり、地域アクションが見えない社協への風当たりは強い。しかし決して、やっていないのではなく、コミュニティワーク（以下、CoW）という定義の上に立って議論できておらず、「CoWが見えていない、CoWを見せていない」のではないだろうか。

■土佐町社協は、10年間の取り組みの中で、旧小学校区ごとに地域活動ができ始め、行政職員や関係機関と共にチームとなって地域支援に取り組む体制もできた。10年でやっとワークの積み重ねが成果となり見え始めたのである。これまで、社協職員への評価を耳にするたびに、CoWの質と量を説明できるツールをさがしていた時、今回の研究会に参加できたことは意義深い。

コミュニティワークのリフレクション

■CRTPでの研究会を通じて、土佐町社協では2019年2月に『地域アクションのちから』第3章を用いて地域福祉チームでワークショップを実施した。まず、それぞれの職員が取り組んできた、地域とのかかわりを改めてストーリーとして確認することから始めた。

■職員は、ワークショップで次のような意見を交わしながら、地域に向き合ってきた気持ちや、苦い経験を語り合った。

【気づき】

- W地区に入った時、住民からの抵抗（また、無駄なことを繰り返すのかという言葉）に向き合ってきたがその段階を踏めたことで、次の地域への入り方のコツを掴んだ。
- M地区ではイベントをすることに留まり、地域づくりに向けたその後の支援ができていなかったが、H地区では、イベントをやるための目的の共有ができていたことがポイントとなった
- I地区において、色々なことに取り組んではいるものの、今こそ、何のためにやっているのかということを住民に問い返す時である。意図的に、住民が価値を感じられる場をつくっていくことが今のポイントではないか。
- 目標と目的とゴールをわかりやすく一人一人に伝えることが大切である。
- 真の意味で「話会う」ということができていなかった。社協がいろんなことを吹っかけてしまっていた。住民が思い描いていることと社協職員が良かれと思うことの乖離に気づいていなかった。

- 反対意見を言う方の気持ちに立ち切れておらず、本当に求めていることは何なのか、聴き取れていなかった。住民は、「地域づくり」という言葉でずかずか入ってくることに抵抗感じていた。
- 話し合いは、若い方が参加しづらい場であり、昔からの絡みを一度ほぐすことも必要であった。
- 地域づくりは住民のものであり、私たちが起こすことではないことを認識することが重要である。

【互いの認め合い】

- U職員が、地域の空気感をつかみ、住民が決めるまでじっくり待つことをやっているところが素晴らしい。
- W職員が丁寧に人の話を聞いているところがいい、一人一人と丁寧に話をしていることは、話し合いの場についたときに、行動化する力を育んでいる。
- 社協職員であるが一人の住民としての自分に立ち返ることができている。
- Y職員のように、進めるだけでなく、止める、スクラップしていく作業をやるワーカーになることが大切。

リフレクションの意義

■今回、リフレクションによる成果は、

- ①住民との話し合いの場がどれほど大切なことか改めて認識できた。「話し合いの場から社協職員は絶対に逃げてはいけない」「話し合うことができるようになれば、意見を出せない方でも自ずと気持ちに問うことをしている」
- ②其々の職員が何を大切にしてきたのかを纏める、整理する、分析することができる。
- ③これまでのワークを新人職員にどのように伝えていくのかを協議できた。

■最後に、リフレクションにより、事の発端となった住民のつぶやきを拾い、社協に持ち帰り、再度住民に投げ返しながら住民間で反響させていったことで、次の展開の鍵を得ていたし、思いもよらない人のつながりができた道筋が見えてきた。さらに住民力が低下する地域にあっても、しっかりとCoWに取り組む事により、住民自らが行動する基盤をつくっていきける事を改めて確認できた。

■社協職員は、地域アプローチの方向性や手法を、どのような考えの基に行うのか示す必要がある。そして、社会資源の関係力がどれほど保たれているか把握し、地域への介入をどのようにするのか明確にすることで、体系的・継続的な業務が明らかとなるものである。

■今後も、リフレクションによりCoWの質と量を見える化し、ストーリーとして次の世代につないでいくツールを作っていく。



土佐町田井地区風景



松ヶ丘地区の懇談会

「鳩のFUNから女子大生」の事例が進化するリフレクション

永坂 美晴

明石市地域総合支援センター



C RTP研究会に入ったきっかけ

■この研究会に入ったきっかけは、一本の電話です。直前に県社協からの紹介で『地域アクションのちから』を買って読んだところでした。この本の中にある整理されたカードとその解説に「なるほど!」と今まで実践ばかりの自分に理念として染み入る本でした。その本をさらに実践的にしたいのでそのメンバーにとのお誘いに思わず承諾をしたには理由がありました。なぜなら、4月から社会福祉協議会に出向し、若いワーカーたちにいか地域での関わり方を伝えるか、もやもやした時間を過ごしていたのです。

事例:「鳩のFUNから女子大生」が学びの場に

■研究会のメンバーとともにカードを使ったグループワークで実践報告を行っているとき、私は何気なく「鳩のFUNから女子大生が生まれてね」と話すとメンバーが急に「なに?それは?」と関心を示されたことに驚き、私は次のように話し出しました。

■「ある担当地域で、地域劇という地域の課題を住民と一緒に演じる手法がある。その劇のシナリオづくりには住民座談会を開催して地域の課題を探すが、一昨年の最初の座談会で「この地域では鳩のFUNがたいへん!」と言いだした自治会長がいて、その意見に他の参加者も「そうだ!そうだ!」と賛同する座談会をどうしようかと思いました。鳩のFUNは環境問題だからと思ったからです。

■でも、あまりにも住民が熱心に語るので「なぜそんなに鳩のFUNがたいへんなのですか?」と聞くと、「公営住宅の上層階に高齢者が住めなくなってハトが住みついてその糞害がたいへんなのだ」と。そうか、鳩のFUNはこの地域の高齢化問題なのだと気が付いて、鳩のFUNをこの年の地域劇のテーマに入れました。この話題を大学の地域実習の先生に話すと「うらやましいです。うちの学生は高い下宿代のためにバイトをして授業中に居眠りをするのです。公営住宅に入れたら…」

■これからの高齢化社会を担う学生が困っている。これも地域課題になるのではと、話し合いを続け、地域劇にも物語として導入すると、数か月後、市と学校が協定を結んで学生が地域貢献を条件に公営住宅に住めるようになりました。翌年、学生が入居後も、学生の特技



最初の座談会

を生かす地域活動で、今はなくなってしまった地域の盆踊りが復活し、敬老会や夏祭りに女子大生の声が響くことになりました。若い人がいないと嘆いていた地域の住民にとって女子大生が来たことは、現代版地域わらしべ長者物語「鳩のFUNから女子大生」かもしれません。

『地域アクションのちから』でさらに進化した「鳩のFUNから女子大生」

■「鳩のFUNから女子大生」をもとにメンバーが検討を始め、いくつもの疑問が出ました。①なぜワーカーは「鳩のFUN」の話が住民から出たときに疑問におもったか? ②就任間もない自治会長がリーダーシップを取るまでの経過はどうか? ③若いワーカーとベテランワーカーのつながりはどうか? 等々。まさに研究会でもリフレクションが行われました。

■さらに自分でもこの本の中にある「コミュニティの組織化の準備と行動」の4過程10段階20核心キーワードに沿って「鳩のFUNから女子大生」を分析してみました。すると、今まで意識してい



地域劇の風景

なかった①住民への関わり方や関係づくり、②地域劇という手法を使いながら課題や計画をスケッチしていく過程、③住民間のつながっていくきっかけと心理、④行動していくと住民の強みや力がでる様子などが次々と理解可能となってきました。

■また、この事例を兵庫県社協の研修に活用すると「この地域だからできたんだ」との声もありました(萩田氏の8頁を参照)。しかし、そのあとの池谷氏(9頁を参照)との対談で、この地域は公営住宅が多く、子どもから高齢者まで多問題を抱えていることや、もともとは自治会の力が弱く、昨年変わったばかりの自治会長とボランティア代表の関係性もできていなかったこと等で地域の危機をむかえていたこと等。ベテランワーカーの活動だけでなく若いワーカーとのチームワークがあつてこそ地域と学生がつながったことなどが明かされていきました。

C RTP参加から得たこと

■コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクトに参加し、私が得たことは、これまで単に「地域づくり」とひとくりにしていた一連の活動を自分の中でも細分化していくことで地域の活動の見方が変わってきたことです。まだ未熟ではありますが、この研究会に参加後は、1層の生活支援コーディネーターとして各地域の活動がどの過程にあるか、どの段階にあるか等を2層の生活支援コーディネーターの話を聞きながら考えるようになりました。

■今後は、この学びを活かし、地域づくりの哲学を少しずつ深めていきたいと考えています。



盆踊りの復活

実践力を高めるためのリフレクション・プログラムの可能性

岡本 晴子

奈良県社会福祉協議会



■『地域アクションのちから』(以下、本書)を活用した実験的ワークショップに参加してみませんか?」編訳者に誘われ、そこから参加したCRTPで、素敵な実践者の方々と議論を重ねながら、1つのリフレクションプログラムが生まれた。私がCRTPに参加する動機づけはいくつかある。①実践力を高めるためにはリフレクションが有効であるという実感があること、②県域の場だけでなく、ワーカーの日常に活用できるプログラムが現場に必要なだと考えていること、③地域づくりに関わる多様な経験・属性のワーカーが活用できるプログラムが必要だと考えていることである。

実践と理論が交差する場づくりの必要性

■県域社協における仕事の醍醐味は、「実践と理論の交差する場づくり」にあると私は感じている。現場の楽しさと悩ましさを両手に抱えたワーカーが、実践をふりかえることで、必要な道を見いだす瞬間を目の当たりにしてきたからである。

■とりわけ、地域づくりのワーカーは「成果のない日常に耐え」(本書13ページ)、日々の現場に立つ。場合によっては数年かかる地域づくりの過程において、「今どこにいるのか」「どこへ向かっているのか」「この道の先にゴールがあるのか」、途方に暮れることもある。そんな時、役立つのは「お勉強」ではない。基礎的な知識や技術、マインドを基盤としつつも、それらを活用して実践を紐解き、次の一步を見いだすチカラである。日々の実践をふりかえる機会と、実践を語り意味づけるための言葉(理論)を持つことが、明日からの実践を変える。

実践現場でのふりかえりの難しさ

■ある社協では、ワーカーが実践行動を共有し、相互にスーパーバイズする場を毎月設けている。そこでは、実践を紐解く「ものさし」をどう得るかが課題である。

■経験の浅いワーカーのふりかえりには、ベテランのサポートが不可欠である。「明日からどうすればよいのか」と切実に「答え」を求めるワーカーに対し、ベテランは小手先のテクニックが役に立たないことをよく知っている。地域づくりの考え方や姿勢、中長期的なビジョンといった「そもそも」の話」を「ものさし」に実践を整理し、次の一手を考えることが必要だという。この社協に限らず、両者の思いにはズレがあり、「そもそも」の話を伝えることは難しい。

■このようにチーム内など、日常的な場面でリフレクションを可能にするプログラムが求められているのだ。

カードワークショップによる「ものさし」の獲得

■研究会に集まった私たちは、本書を活用した実験的なカードワークショップを体験した。所属も経験も異なる私たちの目の前には、本書第6章「コミュニティ理解」に示される言葉(小見出し)が書かれた20のカード。詳しい説明の一切ない短い言葉は、抽象的であったり、鋭い問いかけであったりする。短時間で自分がこれと思うカードを選ぶのだが、その言葉に触発され、今まで出会った住民リーダーの声、実践現場で耳にした出来事を思い起こした。選んだ一枚には、私なりの理由、経験にねざした思いが重なる。まさにリフレクションであった。

■最も大きな発見は、先述の「実践のふりかえりにおける課題」へのヒントである。このワークでは、誰からか提供されるのではなく、「ものさし」を自らがつかみとる。ワークが進むにつれ、他のメンバーが選んだカードに出会い、本質的な議論が深まっていく点も、新鮮であった。現場でも活用できるリフレクションプログラムへの期待が高まった。

事例との組み合わせによるカードワークショップの開発

■実験を通して一つの疑問も生じた。「良質なふりかえりは、どんなメンバーでも再現できるか?」ということである。経験豊かなメンバーは、「抽象的かつ本質的な」カードの言葉から、「具体的な自分の実践」を語り、それを「意味付けする」というプロセスを経て、相乗効果でリフレクションの質が高まった。経験が浅いメンバーでも深めるにはどうしたらよいのか。

■ヒントは、メンバーの永坂氏がある実践を語った場面にあった。取り上げた第3章「コミュニティワーカーとは?」のテーマを象徴するその事例が、私たちの議論を一段深いところへ導いたのは間違いない。この体験から1つのアイデアが生まれた。永坂氏の事例「鳩のファンから女子大生」をカードワークショップの導入として用いることで、経験の引き出しが少なくともリフレクションの深化を体験できるのではないかと、いうものである。兵庫県でお披露目する機会を得て¹⁾、プログラム化が進められた。示唆に富んだこの事例は、永坂氏がさらにリフレクションを重ね、ワークショップ事例として完成した。

地域と専門職の協働をめざしてーリフレクションプログラムの可能性

■今、多様な人が地域との協働を模索している。コミュニティワーカーだけでなく、相談支援ワーカーや、行政職員、分野を超えて幅広く。文化や考え方の異なる人が力を合わせるからこそ、実践を拠り所に理解を深めることが求められる。CRTPで開発したプログラムは、広域から現場のチームまで、或いは経験の差異を超えて、実践を高め合うツールとして開発した。

■新たな気づきもある。プログラム開発過程で永坂氏は、「見たくないカードもあった」と言った。自分と親和性の高いカードを選ぶ傾向にある今回のプログラムでは、永坂氏のようなリフレクションは難しい。リフレクションにはいろいろな側面があり、まだまだ活用の可能性は広がっている。さて、これからが本番である。



1枚のカードに、自分の実践が重なる



奈良県社協の研修会²⁾

1) 兵庫県社協の「地域づくり支援を紐解くコミュニティワーク講座I」(2019年1月22日)では、CRTP研究会で開発した、事例との組み合わせによるカードワークショップが初披露された。なお、筆者は、当日のコーディネーターを務めた。

2) 奈良県社協の研修会(2019年3月11日)にも兵庫県社協と同じくCRTP研究会開発のプログラムが用いられた。

『地域アクションのちから』から自身の実践を紐解く講座の企画と運営

荻田 藍子

兵庫県社会福祉協議会



講座を企画した経緯

■CRTPメンバーは、『地域アクションのちから』に基づくワークショップを体験し、これが現任コミュニティリーダー・ワーカーのトレーニングに応用できるのではないかと考えた。CRTPで見出された永坂氏の事例も活用し、『地域アクションのちから』を用いたトレーニングの場として、兵庫県社協が実施する講座での活用をCRTPメンバーに依頼し、2回の講座開催に至った。

講座のねらいと概要

■講座は、①コミュニティワーク実践の省察による理念の言語化・再確認と、②コミュニティワーク実践の省察方法の習得(日常業務や職場への応用)をねらいとした。つまり、コミュニティワークとは何をどのように働きかけるのかを学ぶ講座ではなく、自分自身が何を源泉として地域に働きかけをしているのかについて振り返る動機づけをねらいとした。

■その上で、1回目の講座はカードワークと永坂氏の実践事例を用いた1日研修、2回目の講座は養父市をフィールドとした1泊2日研修として企画した。

■対象は、「社協や行政、NPO 等において、地域づくり支援を担当する職員」として、社協以外の領域でのコミュニティワーク実践者も対象とした。実際の参加者数と所属は表のとおりである。

1 回目	44 名 (所属：社協 75%、NPO・一般社団等法人 17%、行政 6%、地域包括支援センター 2%)
2 回目	13 名 (所属：社協 12 名、地域包括支援センター 1 名)

研修手法

■1回目の講座では、『地域アクションのちから』の「第3章コミュニティワーカーとは?」、「第9章コミュニティリーダーシップの形成」を使用し、永坂氏の実践に基づき作成した演習事例を用いたカードワークをおこなった。

■2回目の講座は、「第6章 コミュニティ理解」を省察のテーマとした。1日目は、「地域理解」をテーマにした講師陣の対談及びフィールドとなった養父市における小地域福祉活動支援の実践報告を受け、第6章を活用したカードワークをおこなった。2日目は、養父市大屋町明延地区に入り、地元住民のガイドでまち歩きをした上で、地域をみる視点について話し合った。

■ここでいうカードワークとは、『地域アクションのちから』の各章の小見出しをカード化したものを選択し、なぜ自身がそのカードを選択したのかを他の受講者に説明し、意見を交わす中で、実践の源泉を見つめるという演習である。

■この他、省察を深めるために、受講者には事前課題として「自身と地域の関わり」「地域との関わりにおいて心がけていること・悩み」を記入していただき、講座の最後のプログラムで「マイカード」として講座の



養父市明延地区でのまち歩き

気づきや実践に持ち帰りたいことの記入を通じた省察を促した。

講座の評価

■受講者へのアンケート結果は、1回目の講座は68%の受講者が「とても気づきが多かった」、29%が「気づきが多かった」、1%が「あまり気づきがなかった」と回答した。2回目は、100%の受講者が「とても気づきが多かった」と回答した。自由記述では「職場で持ち帰ってカードワークを実施したい」という意見も複数みられた。職場での省察の実行にまで至ったかどうかは追跡を試みなければ分からないが、講座を通じた省察という意味では一定の成果があったと考える。

■また、対象を社協に限定せず、コミュニティリーダーやNPO、行政職員といった多様な構成で実施することが、相互理解と自身にない視点への気づきにつながると実感した。

■なお、1回目の講座では永坂氏の実践から作成した事例演習を通じた省察を促したが、最も有効な省察は、自身の実践を事例化することだろうと考える。

私自身の気づき

■主催者としては、ねらい(到達目標)を設定し、対象設定とそれにあったプログラムについて、講師陣と協議・共有しながら運営するという通常の研修の流れで運営した。しかし、筋書きのない演習でのグループワークや全体会での語らいの中にこそ、“揺さぶり”と学びがあることに改めて気づかされた2回の講座であった。

■これは、自身や受講者に起こる“揺さぶり”を恐れない、率直な講師陣の姿勢が大きいと感じる。たとえば、2回目の最後のグループワーク後には講師から、「地域住民は何を願っているのだろうか」、「生活不安があって暮らしにくくなる住民が現れた場合に、この地区はこのままでいいのだろうか」、「住民の暮らしの切実さと脈絡が心に生き動き、自分のものとして深く感じられる経験をしているか」といった投げかけがあった。「解」を提示するのではなく、自分自身や他者との対話を始めるための「問い」をつくることの意義に気づく場となった。

■もう一つは、コミュニティワーカーの行き詰まり感を出せる場の重要性である。実践の裏には、行き詰まりやモヤモヤと晴れない迷いのようなものがある。そこに共感をし合うことから、行き詰まり感やモヤモヤが少しずつ語られ始め、そのことの正体が見えてくるというような体験が、特に1泊2日の講座では垣間見えた。「今の(社協)コミュニティワーカーには元気がない」という声を聞くことが多い。実際、地域に足を運んで住民と事を起こすだけでなく、膨大な事務事業に追われ、仕事の成果を求められるものの自組織や行政等からそれへの理解が得られないことに疲弊するワーカーも多い。職場内での対話を通じた省察は勿論だが、県社協の役割として現場・組織を離れての分かち合いと解きほぐしの場づくりが必要だと痛感した。

■こうした現状だからこそ、現場コミュニティワーカー発の日本版コミュニティワーカー・トレーニングのプログラムや仕組みを開発したいという夢が一段と鮮明になった。

『地域アクションのちから』を活用した CRTP 研究会の可能性

池谷 啓介

NPO 法人 暮らしづくりネットワーク北芝



「社会的つながり」を取り戻す活動のヒント

■日本のコミュニティオーガナイズイングの歴史の一部として、貧困地域や社会的不利地域での活動は、労働運動や部落解放運動をはじめとする社会運動の中で成果をあげてきた。本来、国内の地域活動は地縁団体が中心となつて住民相互のささえあい、第一次産業（農業・漁業・林業など）を基盤としたサイクルの上で成り立っていたものが、人口流動や核家族化、経済至上主義の波に押しつぶされ、地域のつながりを蝕んでいる。2015年に施行された「生活困窮者自立支援法」は、経済的困窮と同質で社会的つながりの困窮を解決するために地域づくりが必須であると提唱している。

■「社会的つながり」を取り戻す活動のヒントがコミュニティワークの中にちりばめられているのは、誰もが理解するものだ。その手法においては、様々な手法論が先行し、教育コミュニティやマイノリティーグループなど、一部のグループが各地域で実践を積んでいるのが現状である。CRTP研究会では、韓国コミュニティオーガナイザー集団であるCONET（韓国住民運動教育院）が発刊した『地域アクションのちから』を教材にした地域づくり活動実践者のための理解、普及の研究を行った。特に社会福祉協議会をベースとした地域福祉活動の一環として地域組織が社会的つながりを回復する過程を経験し地域力を醸成するプロセスがひとつの長期的視点だと考えた。また、本研究会が、社協、NPO、住民団体、研究者などから構成されていることも多方面からの切り口で議論されるアドバンテージを持っている。

社会福祉協議会を通じたワーカーへの発信

■CRTP研究会では、これまで実践の場を2つの県社協と協働してコミュニティソーシャルワーク研修の講座としてコミュニティワークのリフレクションを実施した¹⁾。これらは、今後、広域においてコミュニティワークを深化させる一つの方法として可能性があるのではないかと実感している。多くのワーカーは、リフレクションすることなく日々の業務に忙殺され、気付いたときには、意図せず地域力の低下を招いていることに自らへ自責を問うことになる。中にはそれに気づくこともなく、自己満足の地域づくりを押し付ける場面さえうかがえる。コミュニティワークのリフレクション作業は、自らを見つめ、地域を俯瞰して映し出す要素が多く含まれる。全国の社会福祉協議会を通じて発信することの可能性の光を実感した。これまでの実習に加え、実践のリフレクションである。



兵庫県社協でのコミュニティワーク講座

箕面市北芝地区での試み

■『地域アクションのちから』にも出てくる北芝地区で、2001年よりコミュニティワーカー的役割を意識してコレクティブタウンの仕掛けを住民とともに積み上げた結果として、地域住民自身がリフレクションする機会がわずかではあるが創出されたと感じる。例えば、2015年の地域実態調査は、「どのように居場所や活動を意識できているか」や「それぞれの取り組みの認知度」などを住民自身で個別調査した。

■それをもとに新たな取り組みの改善などが行われた。認知症高齢者のみまもりをワーカーと住民とで整え、あえてイベントとして居場所をつくることで、地域で関わるきっかけをつくるなど様々な動きを模索している。その活動は高齢福祉や障がい者福祉というカテゴリーでなく、地域全体がコレクティブなまちとして機能することを目指しているのである。ここで特筆すべきは、1970年代より北芝地区は部落解放運動を通して地域での省察（リフレクション）を自らが繰り返してきた素地があることを忘れてはならない。



北芝ボランティア北芝でのボランティアグループ交流会

CRTPの展望

■『地域アクションのちから』は、地域アクションのちからになり得るのか？この疑問は今後継続して持ち続けるべきものであると実感する。それは、多くのコミュニティワークやコミュニティデザインと言われるものが、固定化したイメージや手法論が確立すればするほど、まちづくりの哲学を学ぶことが止まることを意味するのではないか。自問自答し、この本を読み続けリフレクションすることが求められる。

■CRTP研究会はそれを補完する機能として徐々に受け皿を広めていく可能性を持っている。「個」としての省察と「集」としての省察を繰り返すことが、本来、CONETの求めていたことではないか。また、私が活動する北芝地区では、これらの蓄積が地域を超えた相互認知やささえあいの取り組みとして、広がっていくことを中期的な展望にしている。

■最後に、今年度CRTP研究会では、韓国を訪れ（2019年1月）CONETメンバーとの交流や実践研究を行ったことが大きな活力となったことは言うまでもない。CONETに感謝し、今後もささえあっていきたい。



韓国ホンドン地域での実践交流フィールドワーク

1) 兵庫県社協の研修については、8頁を参照してほしい。奈良県社協の研修は、「コミュニティソーシャルワーク研修フォローアップ講座」（2019年3月11日）として実施された。なお、筆者は、両方の県社協の研修の場で、永坂美晴氏との対談などを行った。

townspace WAKWAK の活動と CRTP 研究会への参加

岡本 工介

一般社団法人townspace WAKWAK 業務執行理事 兼 事務局長



自己紹介 —townspace WAKWAKの活動

■まずは、私の自己紹介と活動について述べたい。普段は、一般社団法人townspace WAKWAKにおいて理事兼事務局長として働きながら、大学の非常勤講師等を務めている。townspace WAKWAKは、「すべての人に居場所と出番がある社会」「すべての人がSOSを発信でき、互いに支え・支えられる社会」「新しい公共の主体としての自立・参加・協働による地域社会の再生とつながりのある社会」を理念として2012年に設立した。当法人は、とすれば社会から孤立させられている人たちに光をあて、「排除ではなく社会的包摂」のソーシャルインクルージョンのまちづくりをめざしている。そして、子どもから高齢者までのセーフティネットの仕組み作りを行う非営利型の一般社団法人という形態をとっている。

■法人としては設立6年目ではあるが、1994年から高槻市富田地区を中心に「受ける福祉から担う福祉・共に創る福祉」を合言葉に「新たな福祉と人権・協働のまちづくり」に20年以上取り組んできた。このことにより地元自治会や地域団体、公的機関、学校、企業などおよそ30団体以上との連携があり、地域にある多様な社会資源とのつながりやネットワークを持っていること、現在、大学生から地域住民まで多種多様な100名以上のボランティアに支えられているのも特徴である。

■とりわけ、この数年は、日本全体で課題となっている子どもの貧困を解決するべく、子どもの居場所づくり事業に力を入れている。そこでは、生活困窮家庭をはじめとする様々な課題を持つ子どもたちの学習支援事業をはじめ2つの形態の子ども食堂（地域の誰もが参加できる共生型の子ども食堂と少人数の子どもたちをクローズドで支えるケア付き子ども食堂）を運営している。また、その事業にコミュニティ・ソーシャルワーク事業を連動させることで学び・食の支援を行いながら見えてくる子どもたちの様々な生活課題への対応を関係機関とのネットワークによって行っているのも特徴である。

研究会参加のきっかけ

■私は、今回この研究会にNPO法人まちづくりネットワーク北芝事務局長である池谷さんのお誘いを受け参加することとなった。前述のように私は、大阪府高槻市富田地区を拠点に社会的包摂のまちづくりを展開していることから、『地域アクションの力—コミュニティワーク・リフレクションブック—』（2018 韓国

住民運動教育院）で書かれている住民であり、コミュニティワーカーであり、コミュニティリーダーという立ち位置で参加させていただくこととなった。研究会に出席されている皆さまは、実践知もさることながら専門知もお持ちの方々が多く非常に勉強させられることの連続だった。

学びとして一般化できるものと難しいもの

■研究会を通じて、『地域アクションの力—コミュニティワーク・リフレクションブック—』を読み込み、深める中で、個人的に考えたことがあった。それは、韓国におけるコネットによるコミュニティ組織化の過程の中で起こった社会変革のうねりは、こうしてリフレクションを通して普遍的な学びとして一般化できるものとそうでないものの両面があるのではないかと感じたことだった。研究会を通じて書籍をトレーニングの教材として普遍化するプロセスは実践の普及やコミュニティワーカーやコミュニティリーダーの日々の実践の省察に非常に寄与するものとなっていることを感じていた。一方でコミュニティリーダーの内面（コミュニティに社会変革を起こすインスピレーションの源泉）で起こることは学ぶことが難しいのではないかとということも同時に感じていた。

韓国のコミュニティの組織化の中でコネットのリーダーの内面で起こっていたもの？

■ちょうどそのころ、自らの大阪府高槻市富田地区の実践（公教育および地域・家庭・行政・大学・企業などの多セクターと協働した子ども食堂の創出によるソーシャルアクションの過程）をまとめる中で『U理論』（C. オットー・シャーマー2010）という考え方に出会っていた。それはリーダーが従来の過去からの学習（PDCA）ではなく、未来から兆しをとらえ、それを組織や社会のイノベーションにつなげていくという考えだった。言い換えれば社会にこれまでにないものが生まれる時には、未来からの学習があり、それはリーダーの内面を起点として起こっているという考え方だった。

■そのことから、仮説として韓国のコミュニティの組織化の中においてもコネットのリーダーの内面では何かが起こり、それが具現化することを通して社会変革が起こっているのではないかと考えた。その部分は、クルミ（リーダーの頭の中）を割って見ることはできないので仮説に過ぎないがきっとそういった側面もあるのではないかと考えた。おもしろいもので、ちょうどその考えを

研究会で発表した際にある出席者から「それよくわかります。私も実践に関わりながら次の画が見えることがあるんです。」という言葉があった。

■このことから、この研究会を通じて実践が生まれてきた「哲学部分」にも今後ふれていくことが出来るのであればさらなる学びの深みが起こることを期待している。



子どもの学習支援事業



富田わくわく食堂（子ども食堂）

CRTP に学ぶ地域づくりの本質と振り返り



宇城 絵美

NPO 法人全国コミュニティライフサポートセンター

CRTP誕生まで

■『地域アクションのちから』を伝え、現場で日々活動し、悩む実践者のリフレクションにどう役立てていただくのか。その可能性を探るべく、準備会としての打ち合わせが始まったのが2018年4月のこと。本のエッセンスをカード化し、それを深化することがリフレクションにつながるのか、実験的なワークショップを行政、社協、住民リーダーなどの協力をいただき、6月に実施した。

■実験的なワークショップでは、「専門職・住民という壁を取り払って、一緒に地域について真剣に考える機会になった」「主役は住民であり、専門職はあくまでもサポートの立場である、という考えから、専門職は黒子でなくてはいけないと思っていた。だが、一緒に汗をかき、一緒に喜んでほしい、という住民の声にはっとさせられた」という声が聞かれた。そうした声やワークショップの気づきから、トレーナーと位置づける立場の研究も含めて、当研究会はスタートした。

地域づくりとコミュニティワーカーの意味の再考

■中間支援組織のNPO職員の私には、フィールドとしての恒常的な現場があるわけではない。しかし、いくつかの自治体からの委託をいただき、地域づくりの推進事業に関わるなかで、なかば印籠のように使われる「地域づくり」という言葉のもつ意味の前で立ち止まってしまった。地域とは何を指すのか、それをつくるとはどういうことか。そしてその意味を共通認識として把握ができていくのだろうか、と。

■メンバーの明石雅世氏(2頁を参照)は、研究会で「コミュニティワーカーとは誰のことか」という疑問を投げかけた。それまで疑問に感じることもなく、コミュニティワークは専門職の領域で、それを実践する専門職がコミュニティワーカーである、という既成概念に一石を投じる発言だった。「地域のことを思い、活動をする人は、専門職であろうとなかろうとコミュニティワーカーではないか」と。

「物語」の作成過程におけるリフレクション

■研究会でもワークショップを体験し、そこで永坂美晴氏(6頁を参照)から、鳩のフン害に悩む公営住宅の住民の夢と便利な場所に住みたいという大学生の夢をつむいだ「鳩のフンから女子大生」の実践事例を伺い、それを深める時間が持たれた。鳩のフン害に悩むというコンフリクトで意識の統一がなされていた住民に夢を語ってもらい、受容、気づき、変革といった課程をともに過ごし、「若い人に住んでもらい、一緒にまちづくりを」という願いをかなえていく。その課程には当然、ワーカーとして悩んだり壁に突き当たる場面もあったはずだが、永坂氏は、「物語を書く」ことで振り返りを自身に課している。

■「物語」には、その実践事例に登場する人物のストーリー、そして感じたこと、考えたであろうこと、発言などを落とし込み、一種の読み物のような形に仕上げる。印象的な場面でその時々

での関わりを振り返れるというものだ。さらに、その場でのワーカーの動きを『地域アクションのちから』のコンテンツに対応させることで、ワーカーの動きの意味づけが見える化される効果を生み出した。

■研究会では、永坂氏の実践事例をもとに研修を実施し、共有するプロセスを経てリフレクションの重要性を体感してもらい、さらにそれを自分の実践に照らし合わせて振り返りをする研修を兵庫県社会福祉協議会、奈良県社会福祉協議会の協力を得て実施した。

事例	ストーリー	ワーカーの動き・思い	第3者目による気づき
0	A小学校では、古い住宅地と公園が並ぶ地域。地域では、自治会、老人クラブ、こども会、ボランティア、民生委員等が活動している。なかでも、25年前に組織されたボランティアグループが、助け合い活動を通じて、制度ではなかなか進まない通学路やこどもの生活環境も活用している。しかし、50年前に入居した住民が一斉に高齢化し、高齢、独居、認知症、貧困等、様々な課題を抱えている。ボランティアの継続も難しく、課題は深刻である。		
1	市内の中学校エリアに組織されている民生委員生活支援センターのワーカーは、個別ケースへの対応と合わせて、地域づくりにも積極的に関わってきた。特に、地域住民が参加し続ける「地域」の創出は、地域のリアルな課題を出し合い、どうやって解決するかを話し合い、というステップを繰り返すことで、生活した地域づくりの具体的な課題をみ出してきた。		07/コミュニティ組織が活性化されるように関係する人である
2	今年も「地域」の創出を目的に、自治会を築くことになった。集まったのは、自治会費や共済の大きなボランティアリーダー達。自治会費や、民生委員費、老人クラブ、こども会、一般運動部等だった。早速、「ここでは、これまで出たことのない地域の地域の中間にいる一歩の問題は何か？」と聞く。『鳩のフン』と聞き、		16/コミュニティ組織のポジションをつくらせて活性化させる 17/住民に話し合う 17/住民に話し合う

永坂美晴氏の事例をもとに、リフレクションとの関連付け整理 (岡本晴子氏作成)



池谷啓氏と永坂美晴氏の対談で事例を深化し共有 (兵庫県社協の研修会)

地域づくりのプロセスと地域アクション

■「地域づくり」における一番たいせつなプロセスは、「どんな地域をつくっていききたいか」という意識の共有ではないかと思う。その「どんな」の部分が欠落した地域づくりの推進は、サービスづくりにほかならない。サービスの充実は、一定の利便性を生むことは間違いがないが、形だけのサービスの充実が、その地域での豊かな暮らしの保障であると言えるのだろうか。

■サービスの枠内だけにとどまらせることは地域づくりと同義ではないし、サービスを受けられる人か否かというヒエラルキーの発生は、排除の論理にもつながってしまう。

■では、どうすればいいのか、という話になるが、そのときにこそ『地域アクションのちから』にヒントを求めてほしい。課題解決のための組織化も、単純に地域にないもの、できていないことを見つけてそれを解決するための組織化をするのではなく、自らが住民に溶け込み、住民と対話を重ね、未来図=ビジョンを描くプロセスを繰り返し、丁寧に落とし込んでいく。

■いい意味で、住民はわがままだし、自分勝手である。自分も含めたそんな住民が、「ここで暮らしていくこともまんざらではないな」と思える地域であること、そう思う人が一人でも増えること、これこそが目指す姿なのではないかと思う。

CRTP のきっかけと期待

北川 郁子
七七舎 編集者



始まり

■『地域アクションのちから』の編集過程で、この本は、リフレクション(振り返り・省察)として活用できるという方向性が示されたことで、本の体裁も自ずと1つ1つのフレーズを独立させたような形になったと思う。読み物にするのではなく、読者(実践者)にひっきり間をもってもらう仕掛けをしたということだ。

■「リフレクションのための小見出し一覧」というのも翻訳書独自のもので、原書にはない。頭から読み進むのではなく、ここを見て、気になるページを開いてみてね、という仕掛けだ。そうやって完成した本をみると、書籍として読まれるだけではもったいないように思えてきた。もっと活かせる方法があるかもしれないね、などと編訳者と立ち話をしたのが、このようなワクワクする研究会に発展するとは!実践現場がない門外漢として参加しているが、さまざまな刺激をいただいている。

トライアル

■まず、やってみようということで、トライアルのカードワークが行われた。住民・支援者(コミュニティワーカー)、自治体職員が1つのテーブルについた。このメンバー選定も実験的だったが、グループはとても活発に盛り上がった。

■この時、自治体の視点とそれを受け止める住民の感覚の差が明らかになった(やらせようという姿勢に住民は敏感)。各自の選んだカードが話し合いの中でリンクして、住民が地域を自分たちでよりよい場所に変えたいと思い、動き始めることが地域づくりの基盤になるというような方向に話し合いが収斂されていったという記憶がある。

現場実践を聞くなかで感じたこと

■コミュニティワーカーというのは、理想を持ち続けなくてはならないけっこうしんどい仕事ではないか、と思っていたが、CRTPに集まったメンバーはみんな楽しそうに仕事をしている。ビジネスの世界では、リーダーはビジョンを示すことが強調されるが、地域づくりにおいてもそれは大切なことだろう。メンバーは、皆、自分の現場に明確なビジョンがあるから進むことができる。皆さんの実践発表を聞く中でそう感じた。

期待

■その後、企画された兵庫県社協などのカードワークを取り入れた研修会には、残念ながら参加できなかったが、導入として事例盛り込むなど、さまざまな工夫がなされていて、案外使い勝手のよいツールになっているようだ。目的である実践のリフレクションとしては、効果があるのかどうかは主催者からもう少し深

く聞きたいと思う。面白かっただけで終わらずに、実践にフィードバックできるものになっているのかどうか、など。

■現在のCRTPには、住民リーダー、実践者、中間組織、そして研究者がそろっていて、皆が対等な関係で議論している。忖度などする必要もなく皆が率直に発言できるフラットな場だ。また、住民リーダー2人の参加によって、魅力的な場になっている。なぜなら地域福祉の研究会などは、専門職や学識者がメンバーで住民不在のまま住民主体が語られることが多いからだ。この住民リーダーの活動を研究会でぜひ深掘りしてみたい気がする。

■再び『地域アクションの力』に戻るが、本書で繰り返されるのは「地域変革の主役(主体)は住民である」「住民の力を信じる」ということ。なぜ、これが強調されるのかというと、そうしないと現場実践の際にこれが忘れ去られて、いつの間にか専門職主導になってしまうからではないか。そうなることは危険でヤバイことだ、と本書では警鐘を鳴らしている。だからこそ、コミュニティワーカーにはリフレクションが必要なのだ。CONETが伝えるメッセージはシンプルで本質的だ。

■今後、この本質である「哲学」についても本書をもとに話し合えることを期待したい。



第3回 CRTP 研究会



第5回 CRTP 研究会

CRTP の展開 (2018 年度)

- ・ 準備会 (2018 年 4 月)
- ・ 実験的なワークショップの実施 (2018 年 6 月)
- ・ 準備会 (2018 年 7 月)
- ・ 第1回 CRTP 研究会 (2018 年 9 月)
- ・ 第2回 CRTP 研究会 (2018 年 10 月)
- ・ 第3回 CRTP 研究会 (2018 年 11 月)
- ・ 第4回 CRTP 研究会 (2018 年 12 月)
- ・ 韓国フィールドワーク (2019 年 1 月)
- ・ 第5回 CRTP 研究会 (2019 年 3 月)

※ CRTP は、JSPS 科研費 JP16K04213 の助成を受けて実施されたものである。

※ニューズレターのバックナンバー (Vol.1~8) と Vol.9 (2019年3月) は、下記の研究センターホームページからご覧になれます。

